

身近なまちの風景物語(17)

はれ
晴の風物

あれっ。あっ、そうか。今日がその日なんだ。
道すがら通りかかった交差点で、案内板が目に入った。
これは何かの思召しか。
引き寄せられるように車を止め、様子を見に歩を運んだ。

笠間の菊まつりは、歴史が長いことは知っていた。
しかしそれが今日だとは気づかなかった。

菊は平安時代に中国から伝来した。貴族から武士へ、
そして庶民へと人気が広がり、江戸時代の園芸ブーム
では他の草花とともに品種改良が進んだ。

幕末には、こうした日本の菊が西洋に紹介され、影
響を与えたともいわれている。庶民による花の栽培と
観賞という園芸文化が花開いた。

園芸種が多様になると、菊による装飾や菊細工も
つくられるようになった。菊細工は日本独特の鑑賞法
ともいわれる。園芸業者が菊人形を制作すると、それ
も全国に広まったという。

京都で開かれた菊花の品評会が江戸でも開かれる
ようになり、さらに園芸文化の広がりに伴い、各地で
催されるようになった。

品評会は情報交換の場であり、互いに刺激し合う場
である。効果的な栽培方法や品種の改良方法などが
伝播したに違いない。

明治後期に始まった笠間の菊まつりは百回を越え
た。日本最古ともいわれる。これだけ続けられるのは、
愛好家の裾野が広く、また手間をかけるだけ、その
成果が表れるからに他ならない。去年より今年、今年
より来年と、向上心を刺激する魅力が背景にある。

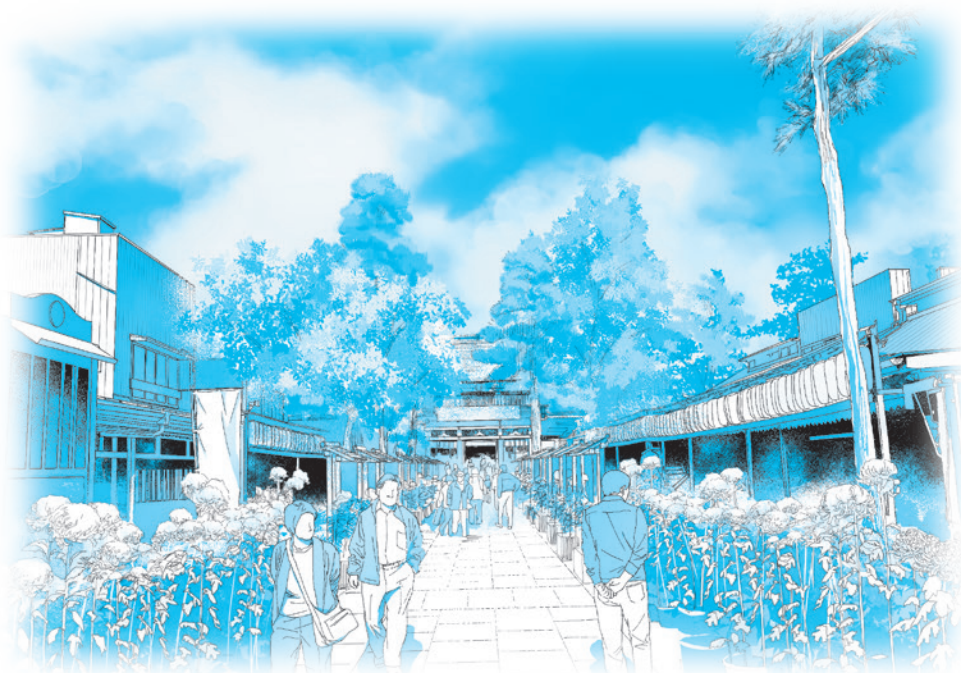
笠間稻荷神社の参道や境内に所狭しと並ぶ爛漫の
菊花は見応えがある。愛好家一人ひとりが丹精込めて
育てた菊花を持ち寄っている。明らかに春の桜まつり
とは趣が違う。

菊まつりは、愛情を注いで育てられた菊花の晴の
舞台である。一鉢に込められた愛情がこれだけ集合する
と、その熱量に圧倒される。

思いがけない出会いに得した気分になった。帰路、
心の中で再訪を約束した。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）